9月4日のウクライナ情報

安斎育郎

●露ブリャンスク州でウクライナの破壊工作部隊を掃討（2023 年 8 月 31 日）

ウクライナと国境を接する露ブリャンスク州で、露治安機関「連邦保安庁（FSB）」などがウクライナの破壊工作部隊を撃破した。31 日、FSB が発表した。

発表によると、FSB は国家親衛隊と内務省（警察を管轄）と共同で、30 日にブリャンスク州内でウクライナの工作部隊の掃討作戦を行った。この部隊は、ウクライナ保安庁、国防省情報総局、特殊作戦軍などの職員らで構成されていた。

部隊はロシア国内の軍事、エネルギー施設へのテロ攻撃を計画していたという。

掃討作戦が行われたのはウクライナの国境に近いブリャンスク州ネベリ地区。工作部隊の戦闘員 2 人が死亡し、5 人が拘束された。

戦闘員らはサイレンサーを備えた米製アサルトライフル、強力な爆弾、大量の手榴弾や NATO 弾、暗視装置など、様々な武器を保有していた。

●日本の防衛費、過去最大の 7 兆 7 千億円　統合司令部、輸送隊新設（2023年8月31日）

防衛省は 31 日、24 年度予算概算要求を決定した。防衛力の抜本的強化を掲げた防衛力整備計画の 2 年目で、過去最大の 7 兆 7385 億円を計上。陸海空 3 自衛隊を一元的に指揮する常設の統合司令部を 240 人規模で新設する。南西諸島などに部隊や物資を迅速展開するため「自衛隊海上輸送群」を設け、広島県の海上自衛隊呉基地に司令部を置く。

23 年度当初の 6 兆 8219 億円から大幅に増額した。23～27 年度の防衛費総額を約 43 兆円とし、中国や北朝鮮を念頭に抑止力を強化する方針。軍拡競争が加速する恐れもある。財源確保のための増税は 25 年以降への先送りが濃厚となっている。

統合司令部は 24 年度末、防衛省と同じ東京・市谷に設置。米インド太平洋軍司令部のカウンターパートとなる。輸送力強化には約 5900 億円を充てる。海上輸送群は 3 自衛隊共同の部隊とし、部隊や装備を陸揚げする「機動舟艇」を 3 隻配備する。

「イージス・システム搭載艦」2 隻に約 3800 億円を確保し、建造に着手。新型迎撃ミサイルの共同

開発には 750 億円を充てる。
（c）KYODONEWS

●モスクワ郊外でウクライナのドローン撃破＝露国防省（2023 年 8 月 31 日）

ロシア国防省は 31 日、首都南東のモスクワ州ボスクレスネンスク地区でウクライナのドローン（無人機）を撃破したと発表した。

モスクワ市のセルゲイ・ソビャニン市長によると、これまでに死傷者や建物の損壊などは確認されていない。現場では当局が対応にあたっている。

ドローン飛来を背景に、モスクワの主要 3 空港では発着の遅れが相次いだ。ブヌコボ、ドモジェドボ、シェレメチェボ空港で少なくとも計 59 便が遅延している。

一方、29 から 30 日にかけての夜にウクライナのドローン攻撃を受けたロシア北西部のプスコフ空港では、現地時間 31 日午前 7 時から運用が再開した。この攻撃では軍輸送機「イリューシン 76」が損傷するなどしたが、けが人はなかった。

29 日夜から 30 日、ウクライナによるロシアへの大規模攻撃があった。7 地域に少なくとも 16 機以上のウクライナのドローンが飛来したほか、クリミア半島には巡航ミサイルによる攻撃の試みがあった。いずれもロシア軍の対空防衛システムが対応し、死傷者はなかった。

●ウクライナのドローン　ロシア 7 地域で大規模攻撃の試み（2023 年 8 月 30 日）

29～30 日にかけての夜、ロシア各地でウクライナの大規模なドローン攻撃の試みがあった。ロシア軍が対空防衛システムで対応するなどし、これまでのところ、一連の攻撃による死傷者は確認されていない。露国防省などが発表した。

スプートニクのまとめでは 29 日夜から 30 日のこれまでに、ロシア 7 地域に少なくとも 14 機以上のウクライナのドローンが飛来した。内訳はブリャンスク州に 6 機、オルロフ州に 2 機、カルーガ州に 3 機、リャザン州に 2 機、モスクワ州に 1 機、プスコフ州とセバストポリ市でもそれぞれ複数のドローンが確認されている。

同省や各州知事によるとウクライナ側の攻撃とロシア軍の対応の概要は以下の通り。

夜間、ウクライナと国境を接するブリャンスク州で飛行機型ドローン 3 機を撃墜。30 日朝には同州のテレビ塔に 2 機のドローンが攻撃を試み、ロシア軍の対空防衛システムによって阻止。昼頃にはもう 1 機を撃墜。

西部オルロフ州でドローン 2 機を撃墜

モスクワ南方のカルーガ州に夜、2 機のドローンが飛来。1 つ目は上空で破壊された。2 つ目は空の石油製品備蓄タンクに突っ込み、火災が発生したが素早く消火された。30 日昼にも別の 1 機が飛来し撃墜。

モスクワ南東のリャザン州で、1 時間半の間隔を開けて 2 機のドローンが飛来。対空防衛システムで破壊された。

モスクワ州西部のルススキー地区でドローン 1 機を撃墜

一方、バルト海に近い北西部プスコフ州のミハイル・ベデルニコフ知事は 30 日未明、SNS 上の公式アカウントで、「プスコフ空港で国防省がドローン攻撃に反撃している」と投稿。火災が発生し、被害は調査中としているが、けが人はいなかったとしている。

●宇軍がザポロジエ原発で煽動、IAEA 職員のローテーション中に露軍の信用失墜を図る＝ロシア国防省（2023 年 9 月 1 日）

ザポロージエ原子力発電所における国際原子力機関（IAEA）の職員らのローテーション時に、ウク

ライナ軍はロシア軍の信用を失墜させるために挑発行為を行おうとした。こうした扇動にもかかわらず、ロシア軍は査察団が安全な通過を確保することができた。ロシア国防省はテレグラム・チャンネルを通じて発表した。

ロシア国防省によると、8 月 31 日、IAEA 査察官のローテーション中に、ウクライナ側は弾薬の爆発を模擬した手段を使用した。これにより、ウクライナ軍は、IAEA 査察団の常駐を安全に保護するというロシア軍の信用失墜を図った。

挑発行為にもかかわらず、ロシア軍は、IAEA のオブザーバーがザポロジエ原発に安全な立ち入りを確保するため、指定されていたオブザーバーらの通過地点から半径 1 キロメートル以内の停戦体制を宣言し、これを厳しく順守した。

IAEA のミッションは 5 人の査察団で構成。5 人はザポロジエ原発の安全状態を観察・評価するため、グロッシ IAEA 事務局長の最初の視察後、2022 年 9 月 1 日から原発内に常駐している。

●処理水放出で意見交換会　福島・郡山市の住民が厳しい批判（2023 年 8 月 31 日）

福島第一原子力発電所の処理水の海洋放出をめぐり、福島県郡山市では 30 日夜、住民グループが政府と東京電力の関係者との意見交換会を開いた。意見交換会には住民約 150 人ほどが参加。住民は関係者から海洋放出に至った経緯などの説明を受けるも、「真摯な回答が得られなかった」として不満をあらわにした。

処理水の海洋放出は今月 24 日から開始された。初回は 7800 トンの処理水が 17 日間かけて放出される計画。 国際原子力機関（IAEA）の報告によれば、日本政府の海洋放出計画は国際的な安全基準に「合致」しており、人及び環境への放射線の影響は無視できるほどであるという。

この決定をめぐっては、中国やロシアなど近隣諸国からの厳しい批判はもとより、日本国内の漁業関係者からも風評被害など懸念の声が上がっている。

●ウクライナ人は TikTok を使って軍備の損失を記録しているようだ（2023年9月1日）

ディミトリーが率いるウクライナの有名な、あるいは悪名高い第 18 国際機動衛兵ティクトク旅団だ。彼らは止めようがなく、すぐにクレムリンを襲撃する。AFU の装備に命中するたびに、彼らの基地に新たな兵士が 2 人誕生する。

https://twitter.com/i/status/1697504865721708632

●米戦車「エイブラムス」 9 月中旬にも最初の 10 両がウクライナへ＝米誌（2023 年 9 月 1 日）

米国はウクライナに供与を約束した戦車「M1 エイブラムス」の第 1 弾として、9 月中旬にも 10 両を引き渡す。米誌「ポリティコ」が 8 月 31 日、匿名の米国防総省関係者の話として伝えた。

同誌によると、今回ウクライナに引き渡されるのは供与を表明したエイブラムス 31 両中 10 両。現在はドイツで修理を行っており、完了次第ウクライナに輸送される。

同誌はこれまでに 9 月中に最大 8 両が引き渡されると報じており、これに 2 両が前倒しで加わった形となる。

米国欧州アフリカ陸軍司令部のマーティン・オドネル報道官によると、米国は秋に 31 両の戦車供給を加速させるとしている。また、すでに 200 人のウクライナ兵がドイツの米演習場で訓練プログラムを修了したという。

言うは易く行なうは難し

西側諸国のウクライナへの戦車供与は 1 月、英国の「チャレンジャー2」を皮切りに相次いで発表された。米国は「レオパルト 2」の供与を渋るドイツに散々圧力をかけた挙げ句、自身のエイブラムスの供与は何かと理由をつけて先延ばしにしてきた。

それから約 8 ヶ月が経ち、ようやく最初の 10 両が引き渡されることになった。だが、当初約束して

いた M1A2 改良型ではなく、旧式の M1A1 型の供与となった。国防総省は、「M1A2 を 30 台送るには 1 年近くかかるのに対して、M1A1 を刷新した場合は秋までに送ることができるため」と説明していた。

時間がかかる理由について「改修」の必要性が挙げられているが、その作業にはロシアに渡れば都合の悪い機密技術で作られた部品を外す作業も含まれているとの見方もある。オリジナルの改良型には、最新鋭の射撃管制システムや熱画像パノラマ照準器、劣化ウランを使用した装甲など多数の先端技術が盛り込まれている。これらを取り外し代わりのパーツをつけるとなると時間がかかるのも無理はない。

燃料をむさぼり食うブタ

「奇跡の兵器」と名高く、ウクライナ紛争の転換点となると信じられていたドイツのレオパルトだが、6 月の反転攻勢開始から少なくとも 25 両が失われ、期待外れに終わった。まだ本格的に実戦投入されていないチャレンジャー2 についても、少量のこれら戦車があるだけで戦場での流れを変えることは望めないというのが軍事専門家の見方だ。エイブラムスがどれほど役に立つのかは未知数だが、突破口にはなりえそうにない。

ウクライナ軍にとっての運用上のデメリットもある。エイブラムスは米メディアでさえ「燃料をむさぼり食うブタ」と評価するほど、燃費が悪いことで知られている。起動させるだけで 6 リットルの燃料が必要で、その後は 1 リットルあたり 200 メートルしか進めない。1 両辺りで 1 日 2000 リットルを消費する。しかも、ただのガソリンではなくジェット燃料だ。31 台そろったときに必要になる補給網確保の困難さは想像に難くない。

さらに、ロシアの戦車「T90M」が約 48 トンなのに対し、エイブラムスは 67.6～73.6 トンとかなりの重量級だ。イラクやアフガニスタンなどの荒野での戦闘とは違い、ウクライナの泥地では身動きが取れなくなる可能性がある。また、露戦車が渡れる小さな橋は、エイブラムスの重さに耐えられないという事態も想定される。

ロシアの退役大佐が、ウクライナ軍への引き渡し準備が進められている エイブラムス戦車の主な欠点を指摘

ロシアの退役大佐で軍事専門家のアナトリー・マトヴィチュク氏は、ウクライナ軍向けの米製戦車エイブラムスは新型車両ではなく、中古だと指摘した。同氏によると、エイブラムスの主な欠点は、ガスタービンエンジンが採用されていることで、これはイラクで期待に応えることができなかった。

ガスタービンエンジンは加速が可能で音が静かだが、大量の燃料を消費し、特に起伏に富んだ地形では航続距離が短くなる。したがって、マトヴィチュク氏によると、米国はあとになってドイツでエイブラムス用の新しいエンジンを注文した。すなわち、ウクライナに供与されるエイブラムスのエンジンは何も問題がないわけではないとマトヴィチュク氏は強調する。

同氏は、改修されたウクライナ軍向けのエイブラムスとロシアの軍用車両を比較した場合、ロシアの T-90 戦車はあらゆる点で「米国製」より優れているとの見方を示している。同氏によると、米国のエイブラムス戦車は、1970 年代初頭にソ連で製造された T-72 戦車の近代化バージョンと同一視できるという。

●鹵獲された米戦闘車「ブラッドレー」の分析結果が判明（2023 年 9 月 1 日）

ロシアがウクライナ軍との戦闘で鹵獲した西側兵器の分析のなかで、米製歩兵戦闘車「ブラッドレー」がロシアの戦闘車「BMP3」に実戦での効率性で劣っていることが明らかになった。露軍需大手「ロステック」傘下の「クルガン機械工場」で副社長を務めるロマン・フロモフ氏がスプートニクに語った。

「特殊軍事作戦で鹵獲されたサンプルの本格的な調査により、米製歩兵戦闘車のブラッドレーはロシアの BMP3 の類似物ではないことが判明した。戦利品の分析結果は、BMP3 が火力や機動性、運用の便利さ、メンテナンス、修理などの性能において、ブラッドレーを 1 段階上回っていることを示している」

ロマン・フロモフ（クルガン機械工場副社長）

例としてフロモフ氏は、ロシアの BMP3 と違い、ブラッドレーは事前に大掛かりな準備をしなくては水上を進めないことを挙げた。また、ブラッドレーには「25 ミリ自動砲しか装備されていない」と指摘した。さらに、ブラッドレーは特殊軍事作戦が行われている地域の土壌では、機動性や移動能力が低くなるとしている。

露著名軍事専門家のアレクセイ・レオンコフ氏は両兵器の違いを次のように評価している。

「ブラッドレーの主な兵器は 25 ミリ砲だ。一方で BMP3 には 30 ミリ砲と 100 ミリ主砲がある。これがより広範な戦闘任務の遂行を可能にしている。100 ミリ砲は相手に深刻な打撃を与える。さらに 8 発の対戦車ミサイルも備えている。ブラッドレーはこの点においても劣っている。ブラッドレーには 2 連装対戦車ミサイルシステム『TOW2』しかない」

アレクセイ・レオンコフ（軍事専門家）

前出のフロモフ氏によると、実は BMP3 とブラッドレーの比較分析は過去にも行われている。1991 年にアラブ首長国連邦の陸軍用歩兵戦闘車の入札が行われたときのことだ。

「当時のソ連からは BMP2 と BMP3、米国からは M2 ブラッドレーが入札した。比較分析の結果、BMP3 のほうが大幅に優れていることが分かり、アラブ首長国連邦は 90 年代に 600 台の BMP3 を購入した」

ロマン・フロモフ（クルガン機械工場副社長）

ウクライナに供与されたブラッドレーは改良されたもので、特に新たな電子システムが加わっているという。だが、操作が複雑なうえ、システムがやられると射撃武器が使えなくなるため、弱点にもなっている。

ブラッドレーを含む鹵獲された西側兵器の部品の研究は現在も続いている。

BMP3 はクルガン機械工場で作られた歩兵戦闘車。歩兵戦闘車としては大型の 100 ミリ主砲のほか、30 ミリ自動砲や機関銃も装備されており、軽戦車の様相を呈している。最高速度は時速 70 キロ、水上でも時速 9.5 キロで進める。追加装甲なしだと重量は 19 トンで、輸送機や揚陸艦で移送できる。

●ウクライナ軍　ドネツク市をクラスター爆弾、焼夷弾で攻撃（2023 年 9 月 1 日）

ウクライナ軍はドネツク付近で多連装ロケット砲から焼夷弾を発射し、クラスター弾を投下した。ドネツク人民共和国の公式のテレグラム・チャンネルが発表した。

現地時間で 1 日午前 5.時 25 分から 5 時 40 分（日本時間 11 時 25 分から 11 時 40 分）の 20 分内に、多連装ロケット砲から焼夷弾 3 発、クラスター爆弾 3 発、の NATO 155 ミリ口径の通常弾がペトロフスコエとキーロフスコエに向かって発射された。

前日の 8 月 31 日には、ドネツク市に対して 155 ミリ口径の砲弾 72 発が発射された。そのうち 11 発がクラスター爆弾、3 発が多連装ロケット砲からの焼夷弾だった。さらにドネツク市のキーロフスキー地区の砲撃現場で不発のクラスター弾が発見されている。

155 ミリ弾は NATO 諸国が採用している統一規格の口径弾。ウクライナはこれまでに米製「M777」、独製「PzH 2000」、ポーランド製「クラブ（蟹）」、仏製「カエサル」などの各種榴弾砲の供与を受けている。

ドネツク州キーロフスキー地区の砲撃現場で、ウクライナ軍の砲弾から出た不発のクラスター子弾が発見された。

救助隊は地元住民に対し、発見された弾薬を拾わないよう、また細心の注意を払うよう警告した。
https://t.me/donbassr/45835

●ウクライナ軍、NATO 弾でドネツクを攻撃　クラスター爆弾も（2023年８月24日）

ウクライナ軍は24日未明~朝、ドネツク人民共和国の中心都市・ドネツク氏を攻撃した。人口密集地域で使われたのは NATO（北大西洋条約機構）諸国の規格である 155 ミリ砲弾で、クラスター爆弾も含まれていた。現地当局が発表した。

ウクライナの戦争犯罪の調査を管轄するドネツク人民共和国の統制調整共同センター（JCCC）によると、ウクライナ軍は 24 日午前 2 時 20 分～午前 5 時 25 分の間に少なくとも 17 発の NATO 規格砲弾でドネツクを攻撃した。また、午前 6 時はドネツク市キエフ地区と市郊外のヤスノブロドフカ居住区に NATO 規格のクラスター爆弾が使用された。

155 ミリ弾は NATO 諸国が採用している統一規格の口径弾。ウクライナはこれまでに米製「M777」、独製「PzH 2000」、ポーランド製「クラブ（蟹）」、仏製「カエサル」などの各種榴弾砲の供与を受けている。

●ウクライナのドローン、露５地域に飛来　原発周辺にも（2023 年９月１日）

１ 日、ウクライナのドローンがロシア各地に飛来した。露国防省の発表などによると、少なくとも ５地域でそれぞれ１機のドローンが撃破された。なかには原発周辺を狙った攻撃もあった。

露クルスク州のロマン・スタロボイト知事は １ 日朝、クルスク原発がある原子力の街、クルチャトフでウクライナのドローン（無人機）1 機が飛来し、建物が損傷したと発表した。

スタロボイト知事は当初、暫定情報として２機のドローンが飛来したと発表していたが、現場の調査で実際は１機と判明したと訂正した。この攻撃で非現住建造物が軽度の損傷を被ったが、死傷者の情報は確認されていない。

クルチャトフ市内にはクルスク原発がある。市庁舎から原発までの距離は約５キロ。

一方、露国防省は同日、首都郊外のモスクワ州リュベルツイ地区に飛来したドローン １ 機を、対空防衛システムで撃破したと発表。モスクワ市のセルゲイ・ソビャニン市長によると、これまでに負傷者や建物の損壊などは確認されていない。

このほか、北西部プスコフ州やウクライナと国境を接するブリャンスク州、ベルゴロド州でも、それぞれドローン１機が撃破された。

ウクライナは民間施設を含むロシア国内の標的へのテロ攻撃を強めている。29 日から 30 日には一昼夜でロシア 7 地域に少なくとも 16 機以上のドローンが飛来している。いずれもロシア軍の対空防衛システムが対応し、死傷者はなかった。

●F16 受領でウクライナの状況は一層混迷＝西側マスコミ（2023 年 9 月 1 日）

ウクライナは、F16 戦闘機の供給によって前線で優位にたてると期待しているものの、F16 を受け取ることでウクライナ軍は実際には被害を被る。スイスの独語日刊紙ノイエ・チュルヒャー・ツァイトゥングがこうした見解を表している。

ノイエ・チュルヒャー・ツァイトゥング紙は、ウクライナは F16 と同時に西側の強力な武器を入手するため、F16 が駐機している基地はロシア軍の最優先的な標的になり、パイロットや整備士らの生命も危険にさらされると書いている。

しかも F16 のメンテナンスは最初からウクライナ人兵士が引き受けることはできない以上、NATO の軍人らがウクライナ領域にいて助けるか、機体を第三国に送って修理をせざるを得ない。ノイエ・チュルヒャー・ツァイトゥング紙は、こうした全ての要因は紛争を大きく緊張化させることになりかねず、ゼレンスキー大統領は後で絶対後悔すると書いている。

米 CNN テレビも、F16 はソ連軍機よりもはるかに繊細なメンテナンスが必要なため、ウクライナ軍は F16 の扱いに苦労するだろうと指摘している。CNN は、F16 の扱い「ウクライナ人にとっては操縦するのと同じくらい難しいだろう」と報じている。同テレビ局の調べでは、F16 は飛行時間 1 時間あたり 16 時間のメンテナンスが必要。また、60 分の飛行あたり 2 万 7000 ドル（393 万円）かかるというメンテナンス費の高さも指摘されている。

CNN はまた、F16 がロシアの防空システムを相手にしたことがないため、ウクライナ軍は F16 を使用した最も効果的な戦術をこれから選ばなければならないと指摘している。

F16 戦闘機のウクライナ供与については、以前にもトルコの航空専門家が F16 はロシアの戦闘機には対抗できないため、これで特別軍事作戦の行方が変わることはないと語っている。

●世界の国々の独立について語るルカシェンコ氏（2023年9月2日）

ここでも米国の顕著な例が挙げられる。 そして彼らは通貨を印刷し、この緑色の紙で全世界を埋めることができます。 彼らは独立していますか？ ウクライナで戦争がありました。 これは彼ら、第一にアメリカ人の利益だ。 しかし、彼らは単独でこの戦いに参加したわけではありません。 彼らは 51 か国を味方につけましたが、現在はさらに増えているかもしれません。 彼らは全世界を団結させようとし、多大な支援を得ました。 なぜなら、彼らはこれらの国に依存しているからです。 したがって、独立性は相対的な概念です。

https://twitter.com/i/status/1697630429757706551